宮城県文化財調査報告書第 31 集

東北自動車道関係遺跡発掘調査略報

（白石市・仙台市～大和町地区）

昭 和　48 年　3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日　本　道　路　公　団

序

経済の高度成長にともなって国土開発が活発化し，全国で高速道路や新幹線の建設，圃場整備，工場用地や住宅団地の造成などの大規模な開発工事が急ピッチで進められつつあります。近年，これらの開発工事によって自然環境や文化財が破壊される例が急激に多くなっております。

文化財は歴史資料として学術的に貴重であるばかりでなく，これに接する人々の人間性を豊かにするということにおいてもかけがえのない文化遺産であります。人間性の喪失，あるいは精神文化の危機が叫ばれている現代において，文化財が私達にもたらす精神的な恩恵にははかり知れないものがあると思われます。

当教育委員会は昭和44年度以来，東北自動車道の建設によって失なわれる埋蔵文化財の発掘調査を行ない，その記録保存にあたっております。本年度は仙台市～大和町間の地域を中心に9遺跡の発掘調査を実施いたしました。資料については現在教育庁文化財保護室で整理研究中でありますが，報告書ができるまでの間調査の成果を一般に公開しご活用いただくために，本年度の事業報告をかねてこの調査略報を刊行いたします。

本略報刊行にあたり，調査に格別のご協力をいただきました日本道路公団仙台建設局，市町村教育委員会，調査参加者ならびに地元の各位に心から感謝の意を表します。

昭 和 48 年 3 月

宮城県教育長　津 軽 芳 三 郎

目　　次

Ⅰ　東北自動車道と関係遺跡の調査 …… 1
Ⅱ　調査遺跡 …… 2
Ⅲ　各遺跡の発掘調査概要
(1)　菅生田遺跡（第2次調査） …… 4
(2)　権現山遺跡（昭和46年度調査） …… 6
(3)　佐保山東遺跡 …… 8
(4)　権現森遺跡 …… 10
(5)　宮下遺跡 …… 12
(6)　菅ノ沢遺跡 …… 14
(7)　原前南遺跡 …… 16
(8)　勝負沢遺跡 …… 18
(9)　日光山遺跡 …… 20
(10)　八谷館跡（第1次調査） …… 22
Ⅳ　写真図版

例　　言

1. 本書は日本道路公団から委託をうけて，昭和47年度に宮城県教育委員会が実施した東北自動車道関係遺跡の発掘調査略報である。
2. 調査遺跡については現在，図面および遺物の整理が進んでいないので，本略報では遺跡の地形図と発掘成果の概略を記すにとどめ，写真図版も最小限にしぼった。本報告書については日本道路公団と協議のうえ，整理がつきしだい刊行する予定である。
3. 本略報は調査にあたった各調査員が執筆し，文末に執筆者を明示した。なお図版の作成は加藤道男，加藤貞子が担当し，編集には志間泰治，藤沼邦彦，白鳥良一があたった。

Ⅰ　東北自動車道と関係遺跡の調査

東北自動車道にかかる埋蔵文化財の取扱いについては，文化庁と日本道路公団との覚書により，県教育委員会がその調査にあたっている。宮城県教育委員会は昭和44年度以来，東北自動車道の建設によって失なわれる遺跡の発掘調査を実施し，記録保存をはかって来たが，昭和46年度までに県南地区23遺跡の調査をほぼ完了し，本年度からは県北地区の27遺跡を対象に調査を開始した。本年度は日本道路公団から委託をうけた12,421千円の調査費で，仙台～大和町間の8遺跡と，昨年度からの継続調査となっている白石市の1遺跡，計9遺跡について発掘調査を行なった。用地買収などの関係で調査の開始時間が遅れたため，当初の計画を消化することが難しい状況になり，八谷館の調査は2月で打切って来年度に継続することにした。また白石市権現山遺跡の調査は昭和46年度に行なったものであるが，調査を終了したのが年度末で昭和46年度の調査概報に間に合わなかったので本略報に収録した。

これらの調査の概要については別項の通りであるが，菅生田遺跡での縄文時代の敷石住居跡の発見や，八谷館の調査で中世館跡の構造が解明されつつあることなどは特記すべき成果である。調査期間中，白石市，泉市，大和町で4回にわたって調査遺跡についての現地説明会を開催し，関係者および一般に調査成果を報告した。

調査にあたっては宮城県遺跡調査指導委員会，宮城県多賀城跡調査研究所の指導助言をいただいた。また関係市町村教育委員会，市町村総務部企画室，および行政区長をはじめとする地元の方々には絶大な援助と協力があった。深く感謝の意を表したい。

なお，本略報刊行にあたり八谷館の調査中に急逝された作業員の佐々木栄氏に対して深い哀悼の意を表するものである。

（志間泰治）

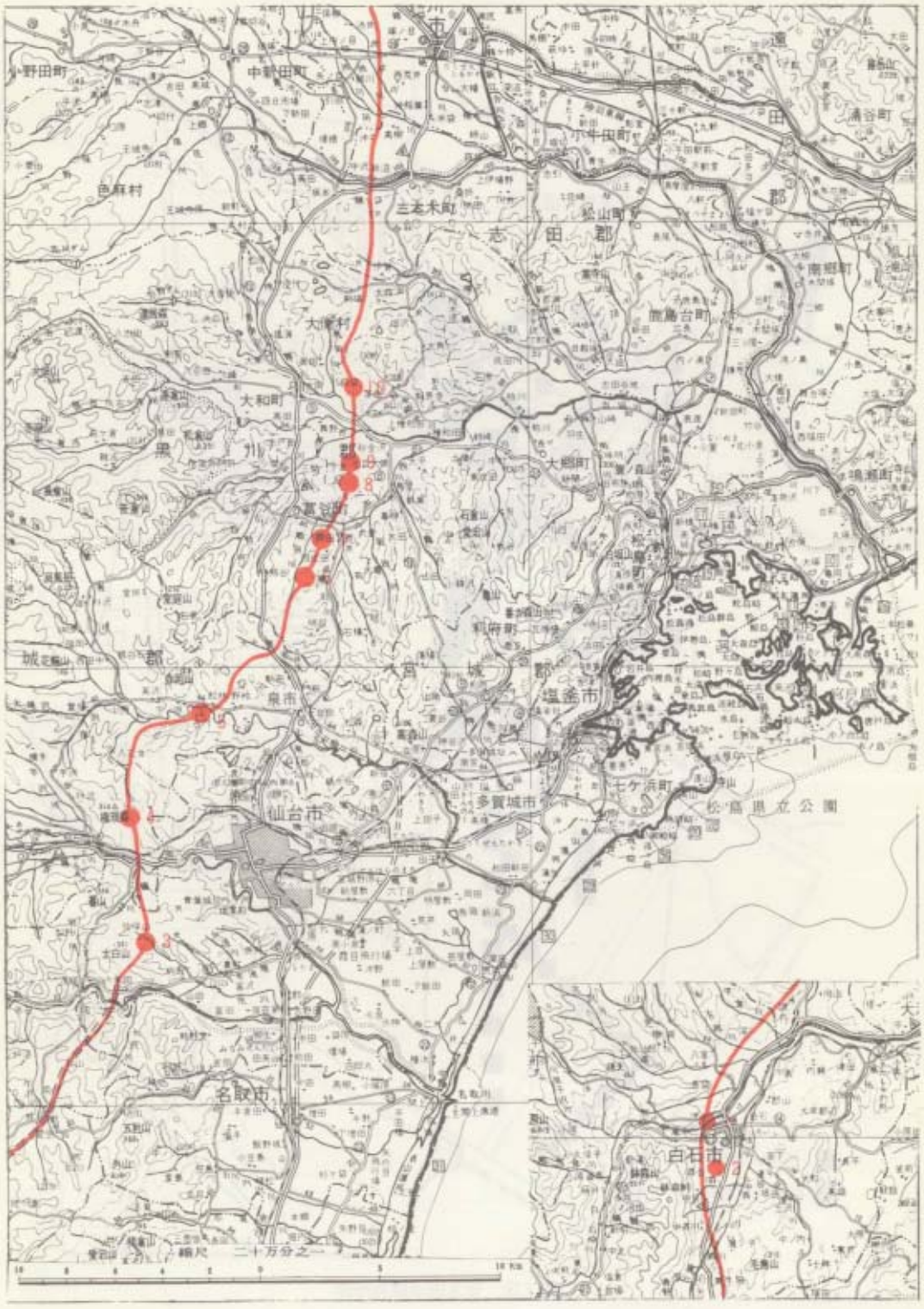
※発掘調査は文化財保護室の下記の職員が担当した。

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦，白鳥良一，小井川和夫，佐藤庄一
嘱　　託　佐々木安彦，三浦圭介，斉藤吉弘，加藤道男，丹羽茂
　　加藤貞子，遊佐二郎，熊谷幹男，田中則和

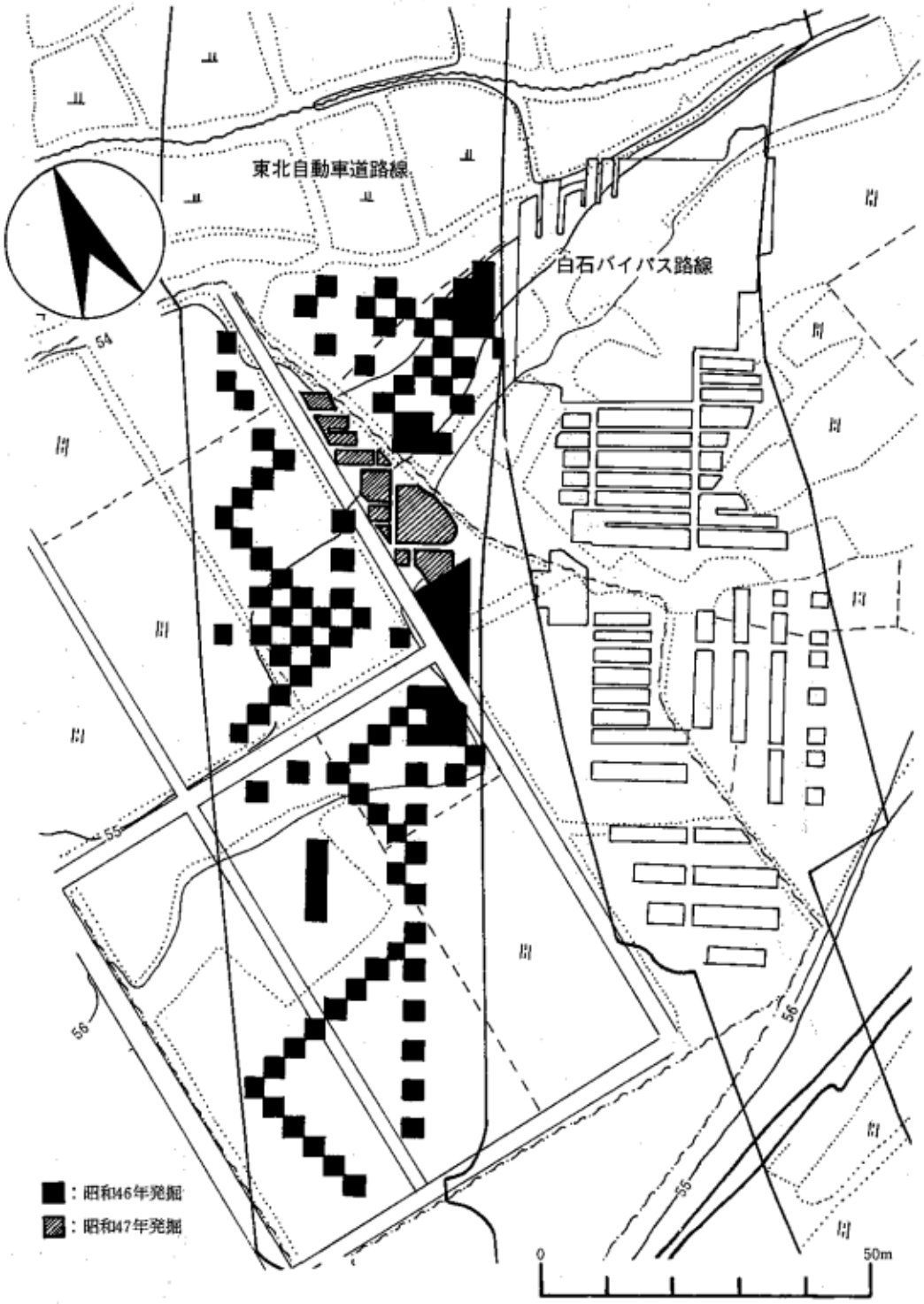
Ⅱ 調 査 遺 跡

調査主体者　宮城県教育委員会
　　日本道路公団
調査担当者　宮城県教育庁文化財保護室

遺跡番号	遺 跡 名	遺 跡 所 在 地	調 査 期 日	調 査 参 加 者
1	菅生田遺跡（第２次調査）	白石市福岡蔵本字菅生田	昭和47年７月10日 ～ 12月27日	阿部正光・高橋勇治（東北学院大学）蛯沢兼実・米村桂子・坂下章子（弘前大学）佐藤訓敏（立正大学）
2	権現山遺跡	白石市森合字権現山	昭和46年11月25日 ～ 12月10日	（測量）東北地形社
3	佐保山巣遺跡	仙台市茂庭字佐保山東	昭和47年10月17日 ～ 10月20日	
4	権現森遺跡	宮城町芋沢字権現森山	昭和47年11月１日 ～ 11月11日	
5	宮下遺跡	泉市上谷刈字宮下	昭和48年１月８日 ～ １月27日	
6	菅ノ沢遺跡	富谷町穀田字菅ノ沢	昭和47年12月５日 ～ 12月21日	
7	原前南遺跡	富谷町富谷字原前南	昭和47年12月５日 ～ 12月21日	
8	勝負沢遺跡	大和町鶴巣北目大崎字日光山	昭和47年７月４日 ～ 10月27日	佐々木和博（国学院大学）
9	日光山遺跡	大和町鶴巣北目大崎字勝負沢	昭和47年９月１日 ～ 10月27日	太田昭夫・三浦好江・斉藤智恵子・真砂まゆみ（以上宮城教育大学）
10	八谷館跡（第１次調査）	大和町落合恭袋字新田	昭和47年10月31日 ～ 昭和48年２月17日	（測量）東北地形社



第1図　東北自動車道関係遺跡位置図



第２図　菅生田遺跡地形図

(1) 菅生田遺跡（第２次調査）

1．遺跡の立地

菅生田遺跡は白石川によって形成された北岸の段丘上に立地する。遺跡付近は標高40～60㎞で，現河床からの比高は2～5㎞ある。この段丘面は平坦でなく，微起伏が認められる。遺跡は微高地の部分に形成され，その背後には泥炭や粘土層の堆積する凹地がある。遺跡が形成されている微高地は黄褐色の礫層からなり，斜面では中砂ないし粗砂層が地山となっている。

2．調査の概要

今回実施した菅生田遺跡の調査は昨年調査未了となって残った約250㎡の杉林の部分である。ちょうど，微高地の西斜面部にあたる。調査の結果，縄文中期末葉の竪穴住居跡二軒を発見した。これを第13号住居跡，第15号住居跡と呼ぶことにする。

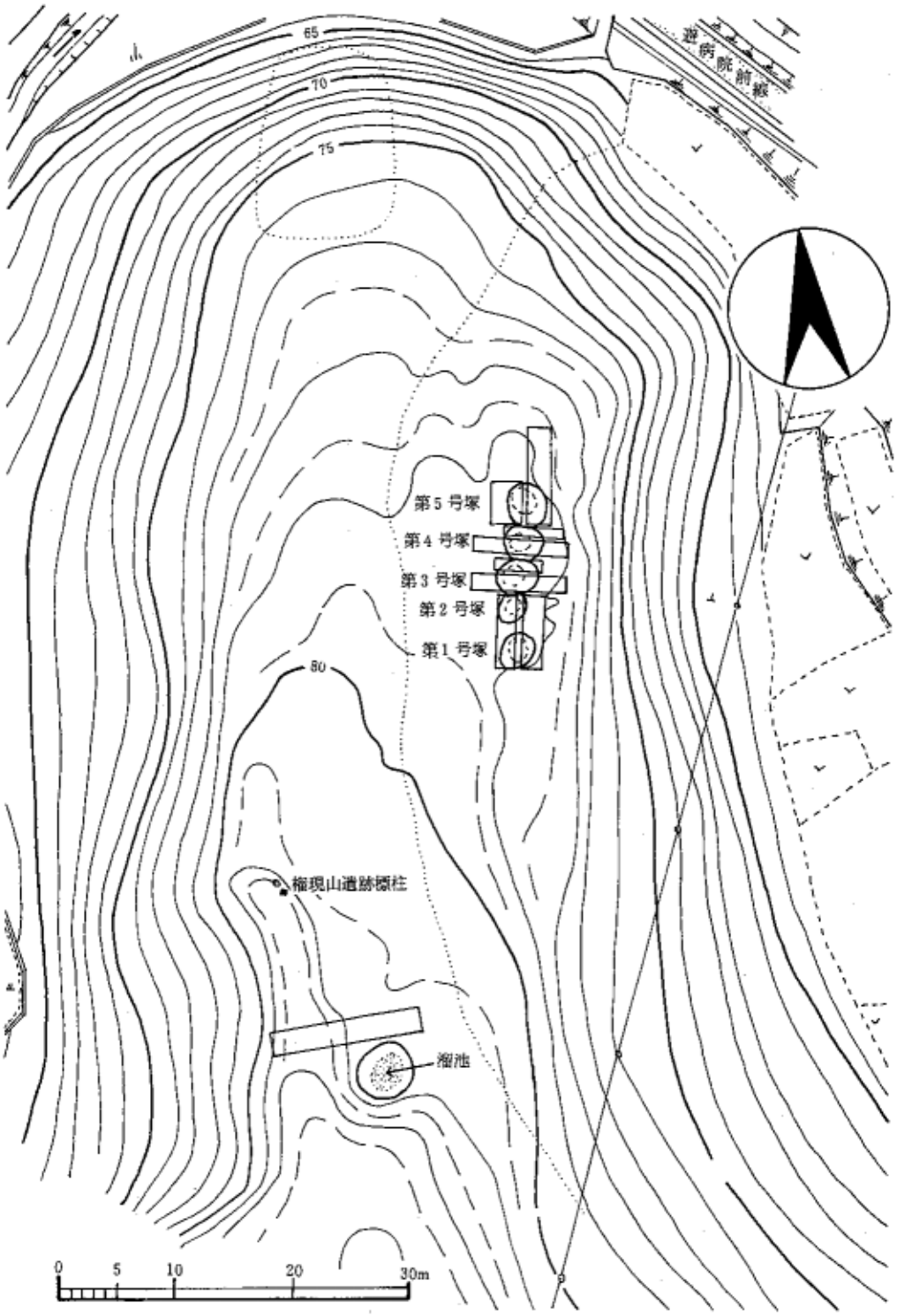
第13号住居跡　表土を20～30㎝掘り下げると暗褐色砂礫層(地山)上に黒褐色土が分布しており，これによって，住居跡の存在が確認された。住居の平面形は壁および床面の範囲が確認できなかったので不明である。床面にはかなり広範囲に敷石が認められた。敷石の材料としては縁のとれた河原石と角張った板状の角礫が同等に用いられている。住居敷石の東端には炉がある。この炉は土器埋設石囲部，敷石石組部，敷石部からなる。大きさは長軸180㎝，短軸90㎝で，長軸方周は西北西－東南東を指す。土器埋設石囲部には底部を欠く2個体分の土器を重ねあわせて埋設している。埋設土器内部およびその周囲の土は焼けているが，土器内部には，焼土・灰・木炭などはなかった。敷石石組部からも焼土・灰・木炭は検出されなかった。しかし，奥壁および側壁の石はボロボロになっており，色も赤味がかっていることからかなり強い火熱を受けたものと推定される。敷石部には火熱を受けた痕跡が認められない。柱穴は検出できなかった。住居床面の敷石を剥がすと，炉の土器理設石囲部西側に横位になった深鉢形土器が発見された。

第15号住居跡　第13号住居跡の南側に近接して発見された。床面まで撹乱を受けているので壁や堆積土の状況はわからない。また，柱穴も検出できなかった。炉は土器埋設石囲部，敷石石組部，敷石部からなる。大きさは長軸130㎝，短軸80㎝で，長軸方向は北西一南東を指す。土器埋設石囲部の埋設土器は二重になっている。埋設土器内部からは焼土や灰は検出されなかった。敷石石組部には2～3㎝の木炭・灰を含む層が認められた。土器埋設石囲部と敷石石組部には第13号住居跡同様火熱を受けた痕跡が観察された。敷石部には火熱を受けた痕跡はない。

3．まとめ

今回の調査では面積がせまいにもかかわらず住居跡が二軒発見された。出土遺物についてまだ整理が進んでいないので正確な年代推定はできないが，縄文時代中期末のものと思われる。

（丹羽　茂）



第3図　権現山遺跡地形図

(2) 権現山遺跡

1. 遺跡の立地

権現山遺跡は白石市の中心部から，南へ約1.5kmはなれた森合地区にある。南北にのびた標高約80mの独立丘陵の北端に近い平坦面のやや東よりに，5基の小塚が南北に一列にならんでいる。地元研究者は森合権現山古墳群と称していた。本遺跡は，東北自動車道工事の土取場に選ばれたため緊急発掘調査を実施した。調査では塚を南から1号～5号と呼ぶことにした。

2. 調査の概要

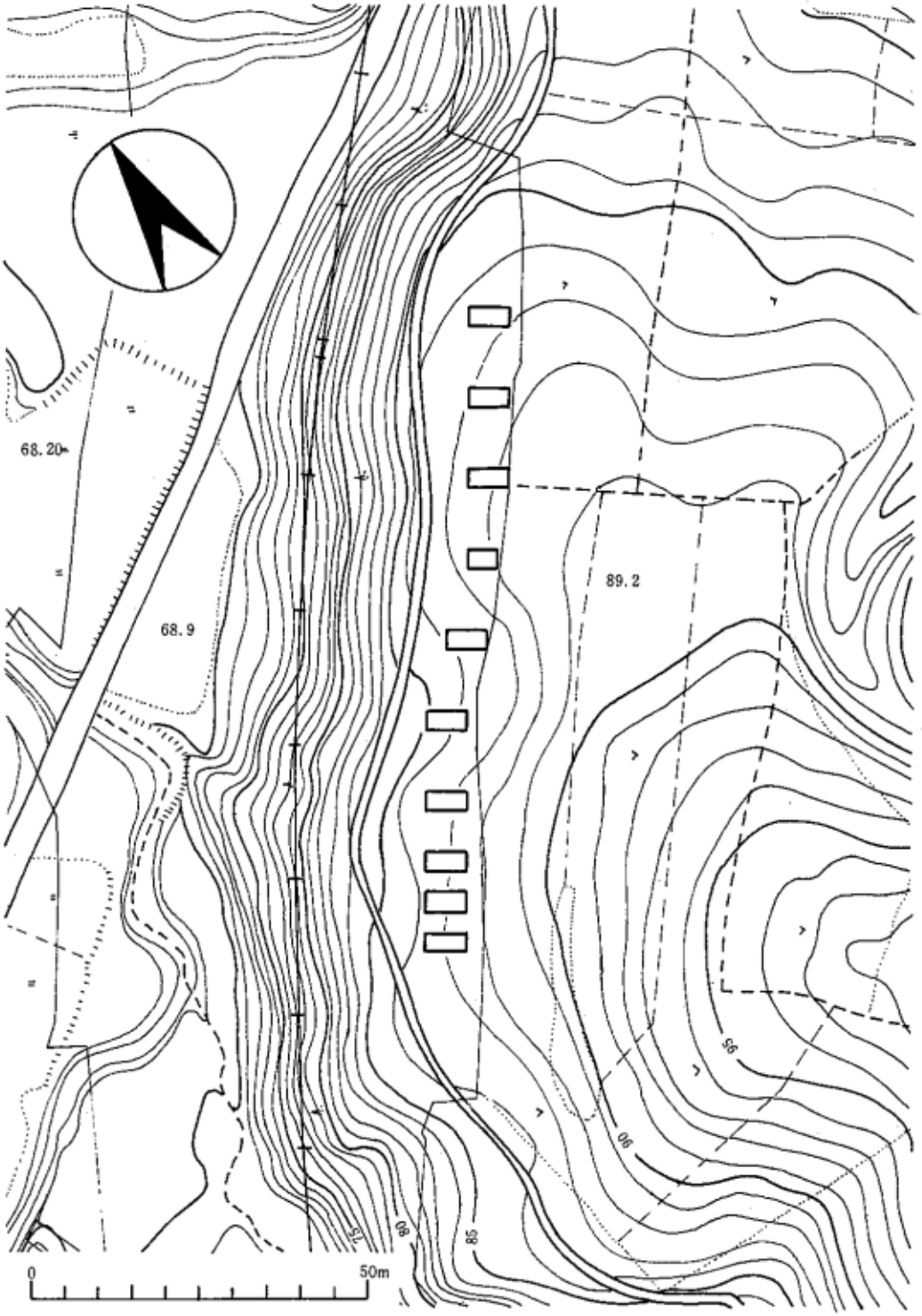
5基の塚は径2～4m，高さ0.5～0.7mでいずれも小規模である。墳丘の積土の状況および内部施設を調べるため，それぞれの塚に巾2～3mのトレンチを設けた。その結果，これらの塚の構造は，第1層は表土で5～10cm，第2層は黒色土と黄色ロームが混入した積土層，第3層は地山のローム層と単純である。内部施設は認められず，出土品もない。また封土内から石が検出されたが，まとまりを示さず，性格不明である。また塚より南へ約30mはなれた所に，人工的な平坦面があり，かっては井戸であったと思われる溜池とその西側に土塁状の高まりが附属する。このため建物跡があったことが推定され，塚との関連をつかまえるため，東西に巾2mのトレンチを設けた。層位は，第1層が表土，第2層が黒味をおびた黄色土で礫をふくむ。第3層は地山となる。表土から地山までの深さは約20cmしかない。遺構は検出できなかったが，古銭(文字不明)が1枚出土した。各塚の状況は次の表のようになる。

塚名	径	高さ	形状	内部施設	出土品
第1号塚	2.9×2.6m	65cm	ほぼ円形	なし	なし
第2号塚	2.0×2.8m	46cm	隋円形	なし	なし
第3号塚	3.8×3.0m	62cm	隋円形	なし	なし
第4号塚	3.6×3.1m	70cm	隋円形	なし	なし
第5号塚	4.1×3.1m	50cm	隋円形	なし	なし

3. まとめ

5基の塚はいずれも小規模で，南北に1列に並ぶ。内部施設や出土品は認められなかった。従って，古墳時代の高塚古墳やそれ以降の墳墓ともことなり，むしろ十三塚などに類似する点が多い。また権現山という地名もあり，中世あるいは近世における修験道に関係ある塚の可能性もある。塚の南にある平坦面には，建物跡が推定されたが，確認を得ることはできなかった。なお，このような小規模な塚の研究は立遅れているので，今後この分野における調査の進展による所が多い。

（佐々木安彦）



第４図　佐保山東遺跡地形図

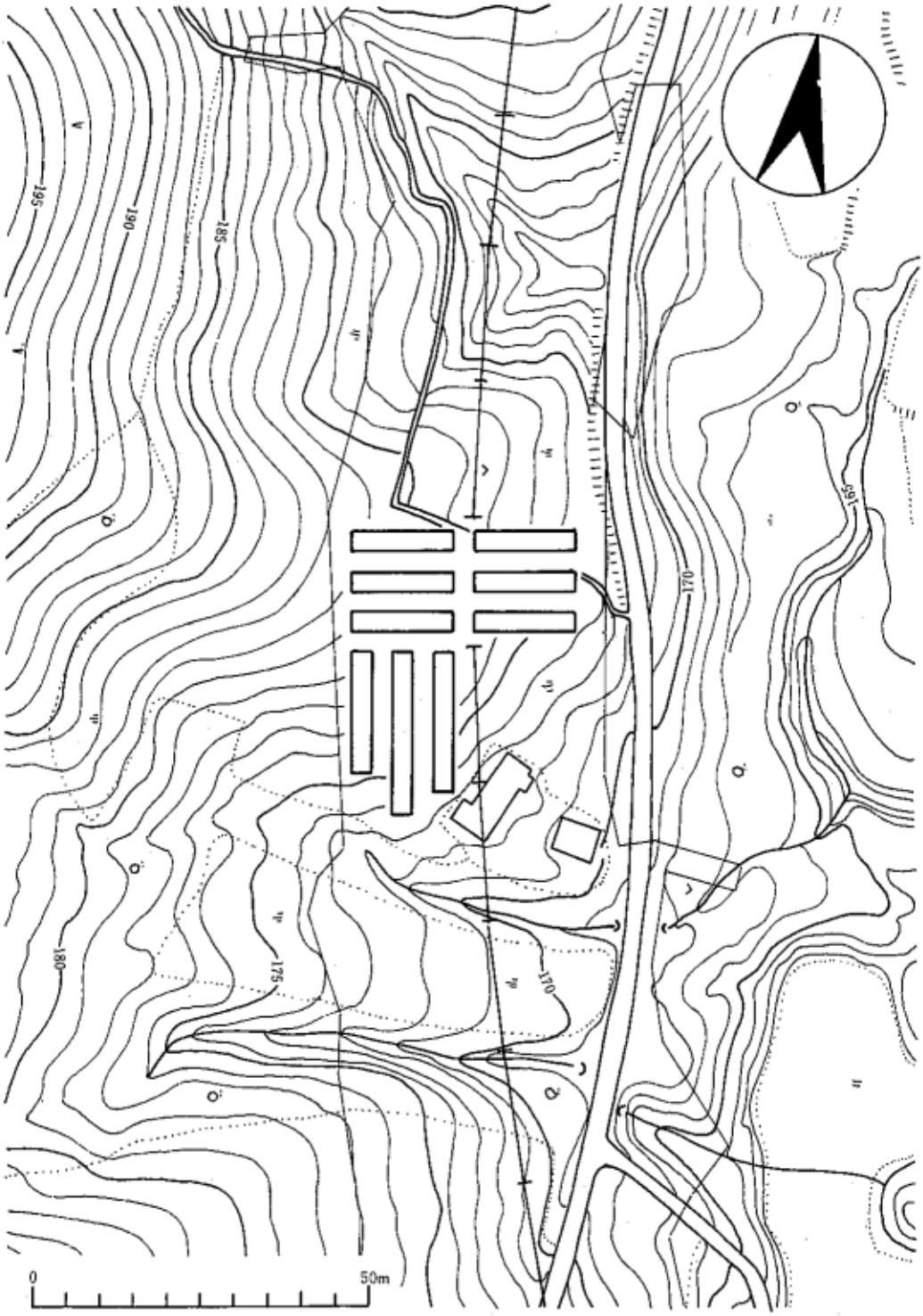
(3) 佐保山東遺跡

1．遺跡の立地

佐保山東遺跡は仙台市の西南部に位置し，長町駅の西方約6㎞にある。標高321㎡の大白山から東南にのびる丘陵は末端部でなだらかな台地を形成しており，その台地のひとつに遺跡が立地している。この遺跡は東北自動車道建設に伴う分布調査で新たに発見されたもので台地の中央部から谷に面した北西斜面にかけての畑地に，縄文土器および平安時代の土師器の散布が認められる。

2．調査の概要

東北自動車道は台地の北裾をかすめて通るため遺跡が路線敷までのびている可能性もあったので調査を実施した。調査は東西10m×南北120mの範囲を対象として行ない，175.5㎡を発掘した。その結果，発掘区では約15～30㎝の表土の下がすぐ地山のローム層になっており，遺構・遺物は全く発見されなかった。この調査結果により遺跡は東北自動車道路線敷から外れていることが確認された。遺跡は台地の中央部を中心としていると考えられる。　（白鳥良一）



第５図　権現森遺跡地形図

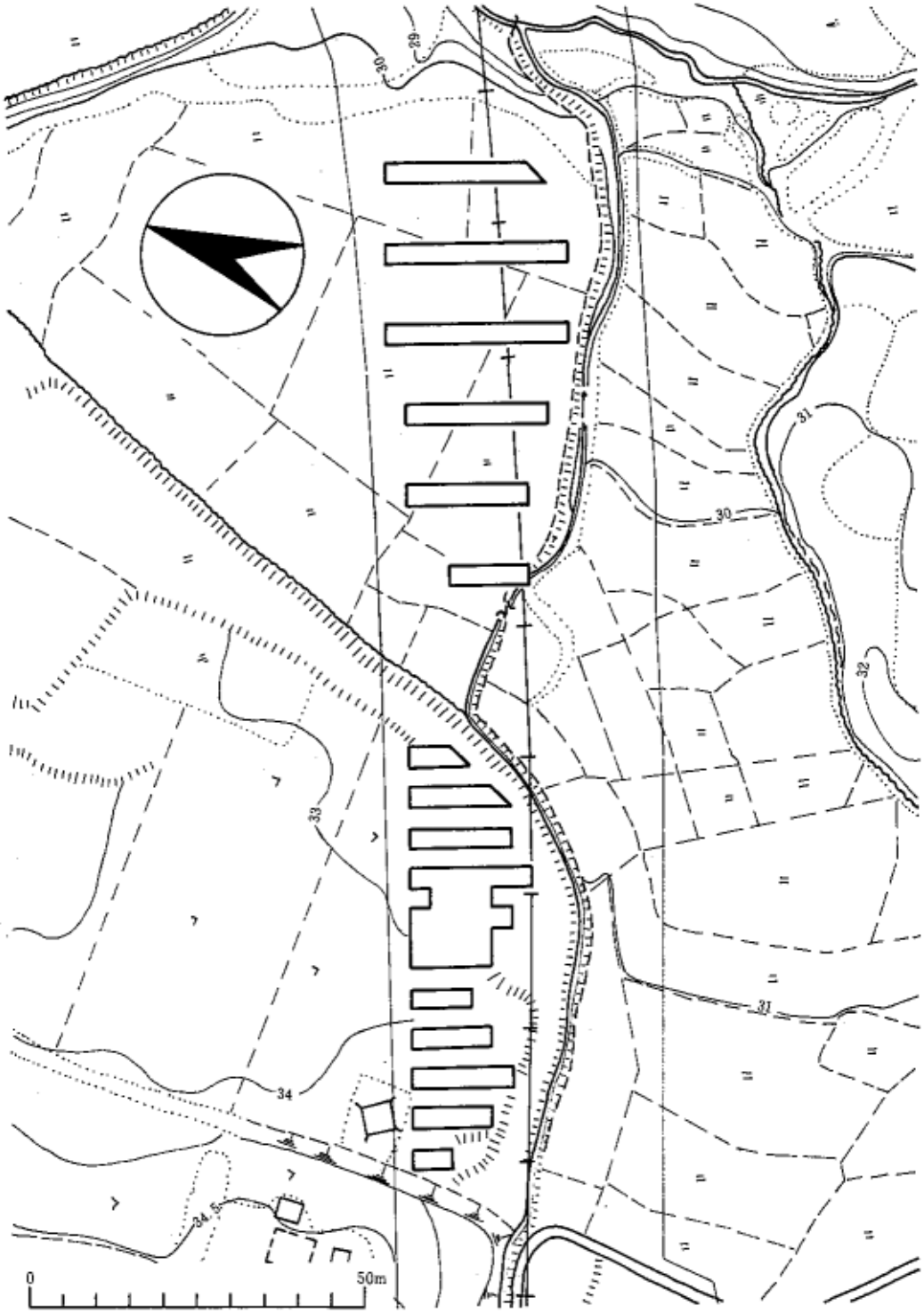
(4) 権現森遺跡

1．遺跡の立地

仙台市の北西には，権現森山（314.2m）を頂点として国見丘陵が広がっている。遺跡は権現森山の東側山麓にあり，標高180m前後の緩斜面上に立地する。

2．遺跡の概要

調査は，東北自動車道の中心杭を中心として，約846m²の範囲に一辺3m方眼のグリットを設定して行ない459m²を発掘した。調査の結果，表土（20～30cm）下すぐロームであり遺構は発見されなかったが，表土下部より，石器9点が発見された。内訳は，石鏃3点，石匕2点，石篦2点，不定形剥片石器2点で，その他フレイク及びチップが10点ほどである。また分布調査の際にも石器1点が採集されている。以上が出土遺物の全てであり，土器が全く発見されなかったためその所属時期は不明であるが，石器の形態や組成などからみて縄文前期ないし中期のものであろうと考えられる。遺跡の主体部は路線からはずれていると考えられ遺跡の状況や性格については不明である。（田中則和）



第 6 図　宮下遺跡地形図

(5) 宮下（みやした）遺跡

1．遺跡の立地

富谷丘陵と七北田丘陵に狭まれた七北田川中流域（泉台地）には，4段の河岸段丘が発達している。宮下遺跡はこの段丘中の最下段である実沢段丘の西端(泉市街西方3.7㎞)に位置する。この段丘は標高約20㎜でかなり広い平坦面を有し，南側及び東側は若干低くなって水田に続いている。古代から七北田川中流域に沿って上方と東北北部を結ぶ交通路が発達したといわれ，中世～近世の館跡も多い。

2．調査の概要

調査は東北自動車道にかかる約2600㎡の範囲を対象に行ない850.5㎡を発掘した。調査の結果，平安時代の竪穴住居跡1軒と土壙1基を発見した。

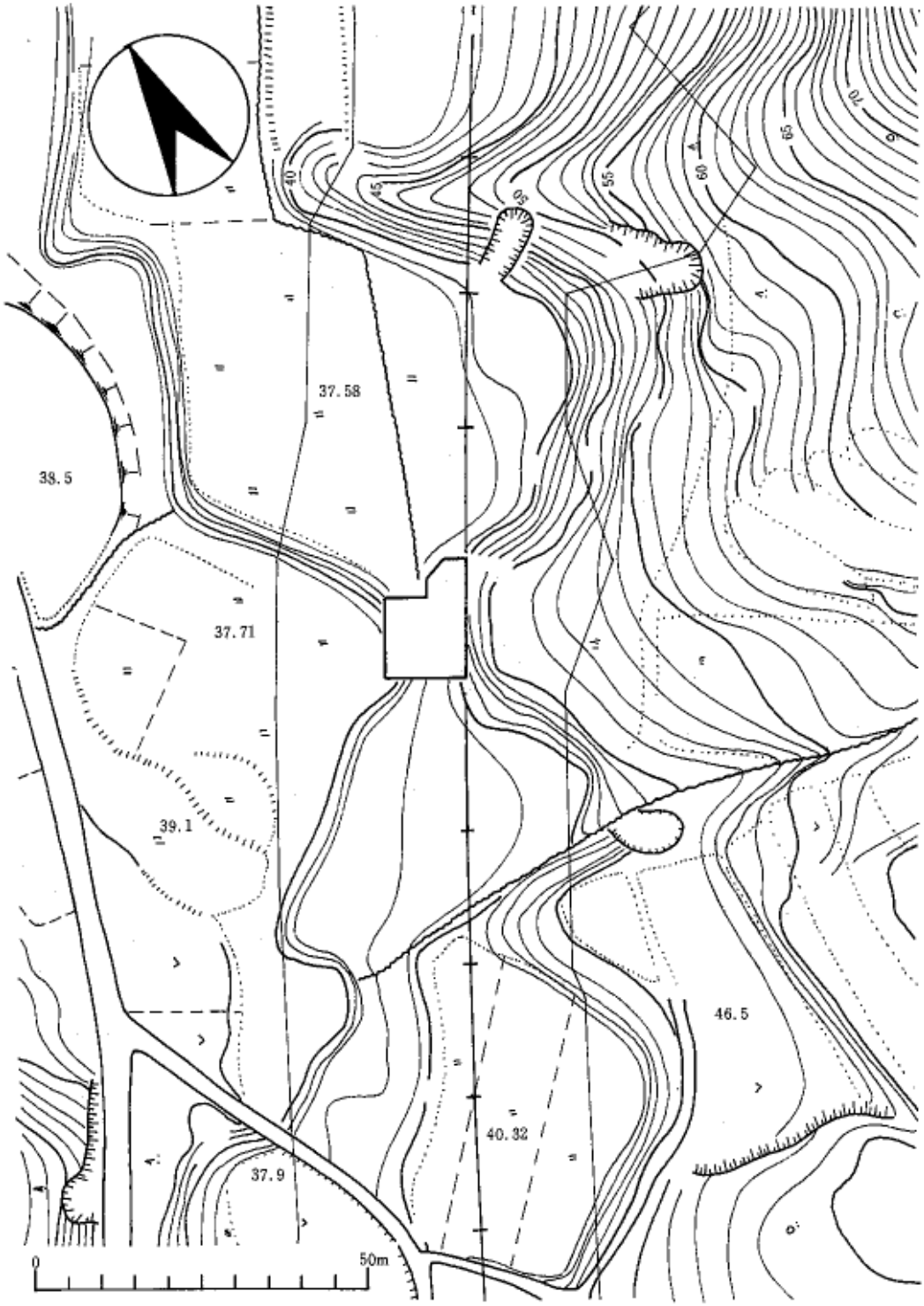
竪穴住居跡　表土下の暗黄色ローム面で7㎜×6.7㎜のほぼ正方形のプランをもつ住居跡が確認された。埋土は，褐色微砂質土で，若干のしまりと粘性をもち，炭化物を霜ふり状に含み，こぶし大の円礫が多数入っていた。床面直上の層は，暗褐色微砂質土で炭化物を多く含み，若干のしまりと粘性がある。現存壁の高さは，約10～20㎝で，立ち上がりは垂直に近く，壁面は，比較的しっかりしている。床面は，暗黄色のロームで若干の凹凸があり，西半面には，小石が散在している。中央部は非常に硬くしまり壁に近ずくにつれて軟かくなる。南辺隅では，貼床が認められた。主柱穴と思われるピットが，北半床面で，住居跡の対角線上に2個認められ，支柱穴と思われるピットが住居跡各壁面外側に沿ってほぼ規則的に17個配されていた。両者共，埋土は，住居跡埋土とほぼ同じである。住居跡の東南隅で2.5㎜×1.4㎜程の長方形のピットが検出された。埋土から完形及び完形に近いものを含む多量のロクロ調整の内面黒色土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）が出土したが，この中には，「林」の墨書のある内面黒色糸切底土師器坏3点含まれている。このピットが住居跡に伴うものであるかどうかは，なお検討の余地がある。カマドは，東壁中央からやや南寄りで，壁から少し内側に寄っており，カマドの基部と考えられる数個の凝灰岩と円礫が残存している。周溝はない。

土壙　住居跡の東に数㎜はなれて壁の周囲が焼けている0.8㎜×0.6㎜の土壙があり，埋め土には，木炭・焼土を多量に含んでいた。時代は不明である。

3．まとめ

(1) 平安時代の住居跡1軒と時代不明の土壙1基が発見された。

(2) 調査区域は，河岸段丘の平坦面の南縁辺部を横切る自動車道路敷内で，遺跡のほんの一部であり，道路敷外の北側の広い平坦面には大規模な集落の存在が予想される。　（田中則和）



第７図　菅ノ沢遺跡地形図

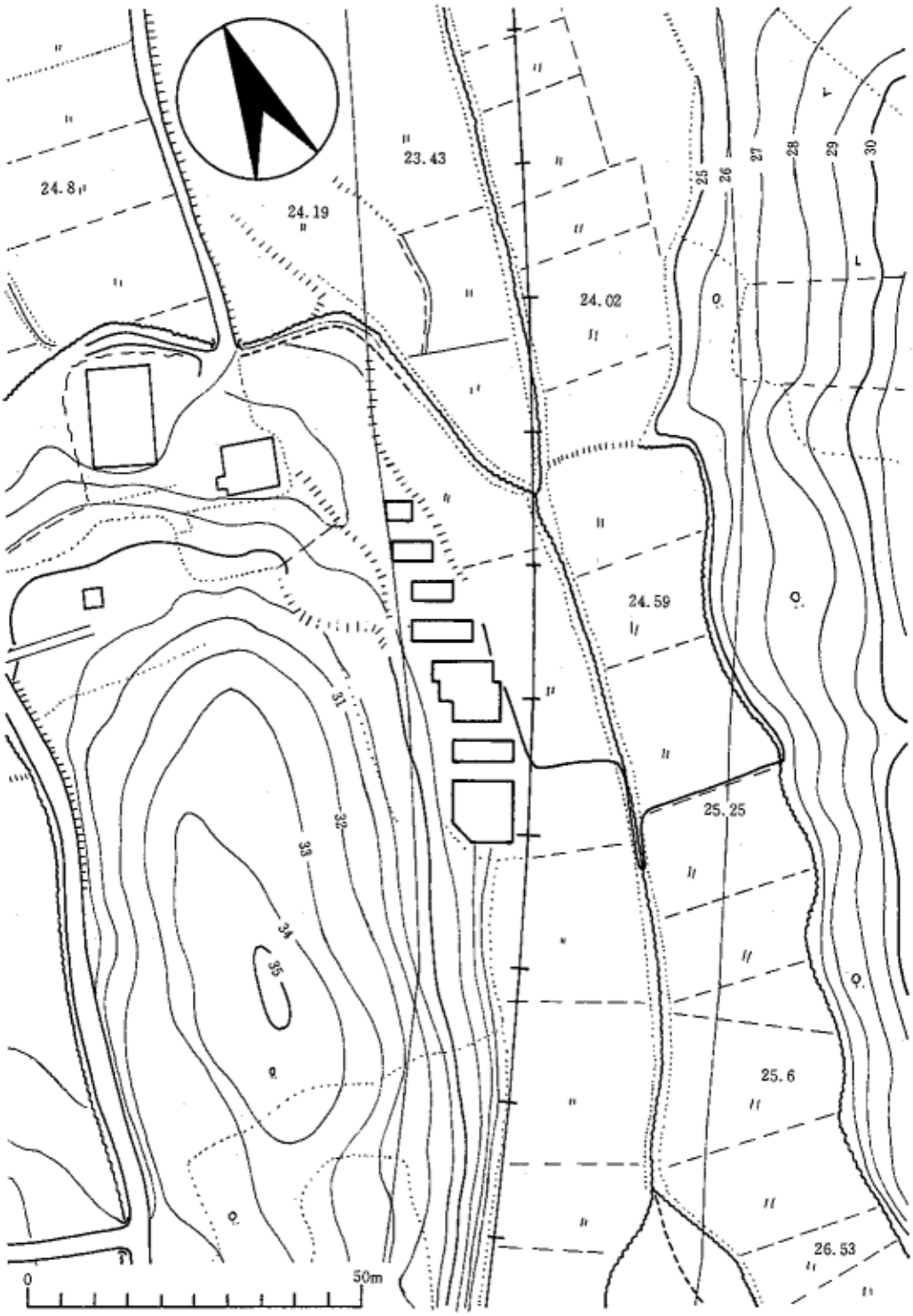
(6) 菅（すが） ノ 沢（さわ） 遺 跡

1．遺跡の立地

富谷町の南東部には標高60～80㎜ほどの南北にのびる5つの丘陵がみられる。遺跡はその丘陵のひとつに立地しているが，同じこの丘陵の尾根上には穀田十三塚や穀田経塚などの遺跡もある。この遺跡は東北自動車道に関した遺跡分布調査で新たに発見されたもので，遺跡は丘陵西側の沢に面したせまい台地に営まれており，台地上の畑に平安時代の土師器が散布している。遺跡付近の標高は約50㎜である。

2．調査の概要

東北自動車道は台地の西裾を通るが，遺跡が道路敷までのびているかどうかを調べるため調査を行なった。台地上の雑木林中に調査区を設定し175.5㎡の発掘調査を行なったが，その結果，50～60㎝の表土の下はすぐローム層に達しており，遺構・遺物ともに発見されなかった。従って遺跡は道路敷まで延びてはいないことが確認された。（白鳥良一）



第 8 図　原前南遺跡地形図

(7) 原前南遺跡（はらまえみなみ）

1．遺跡の立地

原前南遺跡は富谷町の中心部から東へ約1.5kmの位置にある。前述の菅ノ沢遺跡と同じ丘陵上の北に突き出した標高約30mの小台地に立地しており，畑地に土師器，須恵器が散布している。

2．調査の概要

調査地点は台地の東斜面にあたり，道路敷にかかる約600㎡の範囲を調査対象とし，約260㎡を発掘した。調査の結果，縄文時代の遺物包含層と平安時代の住居跡が発見された。

縄文時代　縄文早期～前期の遺物包含層が検出され，縄文施文のある繊維土器が少数出土したが，遺物の整理が進んでいないので詳細は不明である。

平安時代　竪穴住居跡が3軒発見された。いずれも斜面につくられているため，住居の一部が耕作などにより削平され，こわされている。各住居跡の概略は次のようになる。

〈1号住居跡〉　残存する西壁の長さは約5.5mあり，コーナーがほぼ直角の方形プランをもつ比較的規模の大きな住居跡である。幅約10cm，深さ約8cmほどの周溝が住居をめぐっており，周溝の一部は壁にくい込んでつくられている。柱穴は壁ぞいに2個，床面に2個検出された。床面は堅くしまっている。床面からの遺物の出土は少ない。カマドは南壁のやや東寄りにつくられている。カマドの基部に火熱を受けてボロボロになった切り石が2個検出され，カマド内部からは1個体分の土師器甕が発見された。煙道はすでに削平されていた。

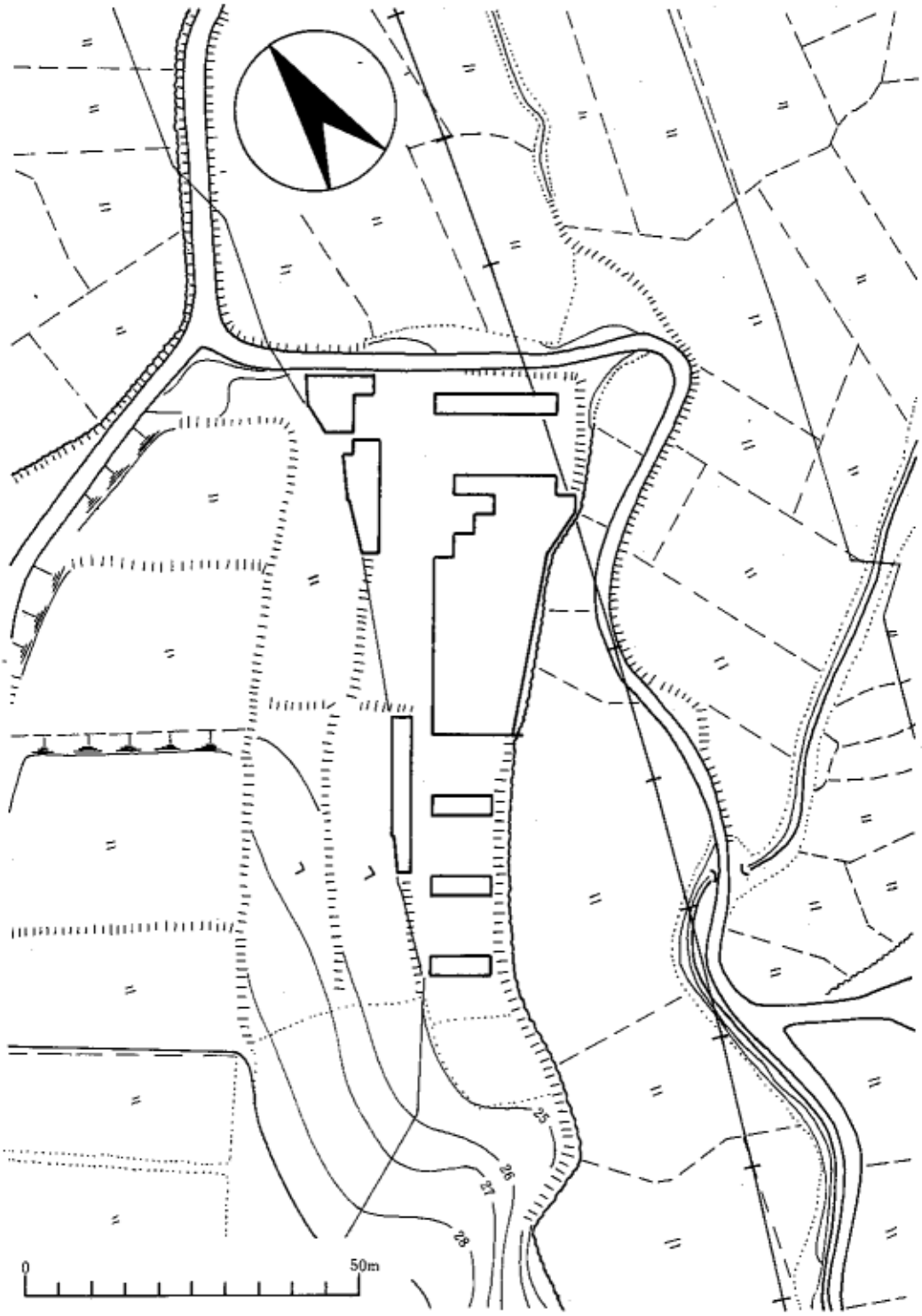
〈2号住居跡〉　3号住居跡と重複しており，後からつくられた3号住居によってこわされている部分がある。規模は東西約3m，南北4.5mで隅丸の長方形プランを呈している。幅約40cm，深さ約8cmの周溝が全体にめぐっている。床面には木炭や焼土が薄く堆積し堅くしまっている。住居跡内から遺物の出土は少ない。カマドは西壁に張り出してつくられており，長さ約1.5mの煙道がついている。柱穴は検出されなかった。

〈3号住居跡〉　2号住居跡の上につくられた住居である。耕作などによる削平がひどく，不明な点が多い。西壁の長さは約3.7mある。カマドは西壁につくられており，住居跡北西隅には貯蔵穴と思われるピットがある。住居跡内からの遺物の出土は比較的多い。周溝や柱穴は検出されなかった。床面には一面に焼土や木炭が厚く堆積しており，この住居は火災にあって廃絶した可能性が強い。

3．まとめ

今回の調査では縄文時代早期～前期の遺物と平安時代の竪穴住居跡3軒が発見された。これらに関連する集落は道路敷から外れた西側の台地上に中心をおくものと考えられる。

（白鳥良一）



第 9 図　勝負沢遺跡地形図

(8) 勝　負　沢　遺　跡

1．遺跡の立地

遺跡は吉岡の中心部から南東約4㎞に位置し，富谷の町並から北東にのびている丘陵北端の勝負沢と具足沢にはさまれた舌状台地の突端部に立地している。遺跡付近の標高は約25ｍである。数年前の開田の際，丘陵の一部を削平し盛土が行なわれたため，地形は変化している。

2．調査の概要

調査は，東北自動車道敷地内の約3000㎡を対象に行ない，約750㎡を発掘した。調査の結果，縄文時代の遺物包含層，縄文時代の住居跡2軒，平安時代の住居跡1軒が発見された。

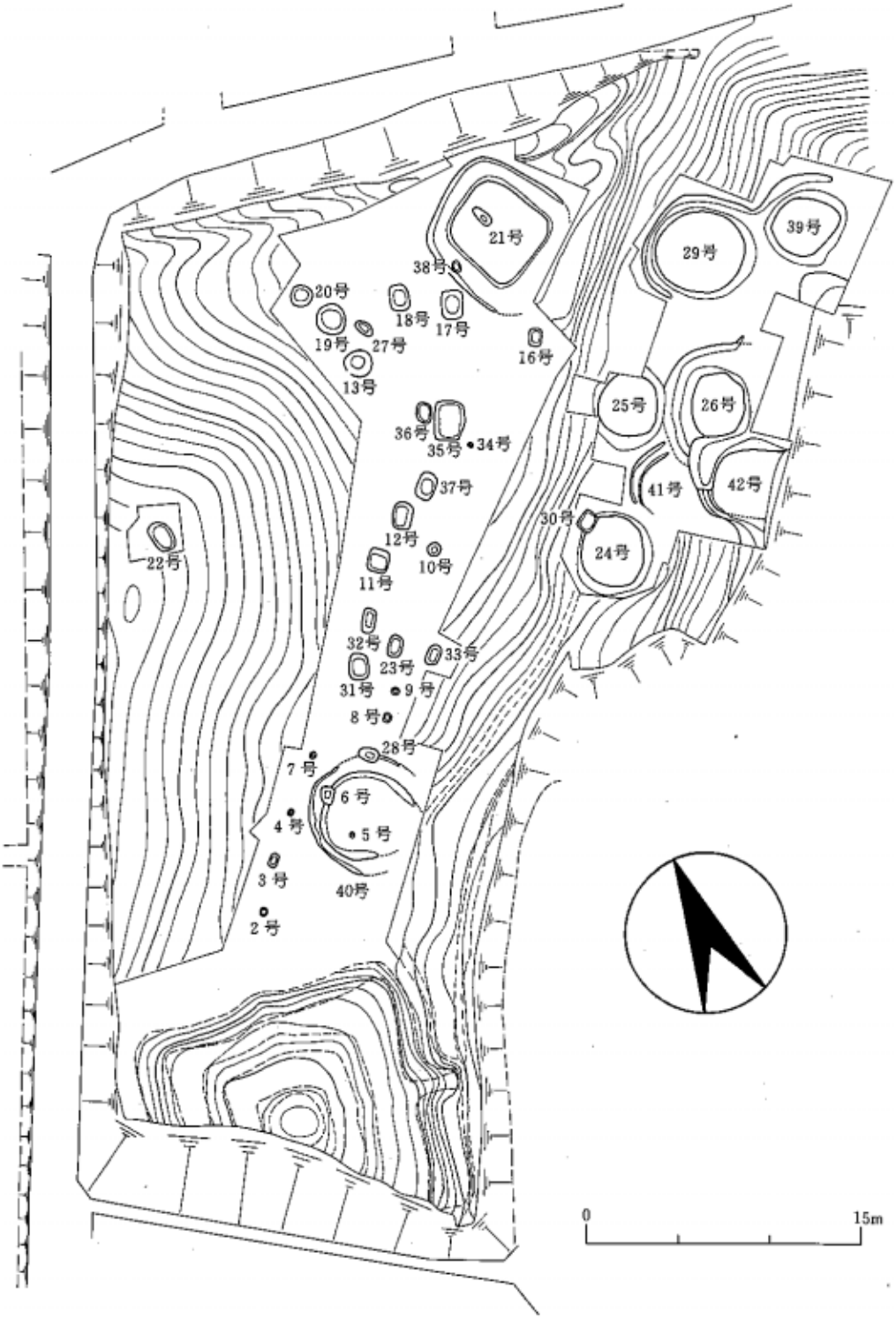
縄文時代の遺物包含層　台地の東斜面で約200㎡の範囲に縄文時代中期中頃のきわめて保存良好な遺物包含層が確認された。包含層は厚い部分で約30㎝あり，中から多量の土器や石器が折り重なったような状態で発見された。土器は口縁部に大きな突起や把手をもつ深鉢形土器で胴部には粘土紐貼付による渦巻文様が施されており，大木8b式および大木9式と考えられる。また石器は石鏃や石槍，石匙，石錐，石皿，凹石，打製石斧，磨製石斧などが発見された。出土遺物はダンボール15箱あり，整理中である。ほかに遺物包含層の西端で小さな河原石で囲まれた埋甕が1個検出された。

縄文時代の住居跡　台地上で竪穴住居跡が2軒発見されたが，いずれも撹乱がはげしく住居跡の全容は把握できなかった。1号住居跡は，壁の一部が確認されただけであり，平面プランはよくわからない。床面に河原石で囲んだ径2ｍの石組炉がある。2号住居跡は北壁の一部が残存しており，ほぼ円形のプランをもつと考えられる。床面に石組炉の一部と思われる河原石が確認され，その周囲2ｍほどに焼土がみられた。これらの住居が営まれた時期は遺物包含層と同じく縄文時代中期中頃である。

平安時代の住居跡　斜面にあるため住居跡の東半分はすでに破壊されていたが，西壁の長さは約4.5ｍあり，方形プランをもつと考えられる。壁の下には巾15ｍの周溝が巡っている。遺物は，内黒糸切土師器坏，須恵器が出土した。時期は平安時代である。

3．まとめ

勝負沢遺跡は縄文時代中期と平安時代の複合集落跡である。縄文中期の竪穴住居跡は台地上で2軒発見され，廃棄された土器などの遺物は台地の東斜面に遺物包含層として厚く堆積していた。縄文時代の集落のあり方を示す貴重な遺跡である。また，地点を異にして平安時代の竪穴住居跡も1軒発見された。上記のことから東北自動車道敷から外れる西側の台地平坦部には縄文時代，平安時代の集落の存在が考えられる。　（斉藤吉弘）



第10図　日光山遺跡遺構図

(9) 日光山遺跡

1．遺跡の立地

日光山遺跡は，大和町北目大崎の標高約40㎜の独立した丘陵にある。この丘陵は開田により南北両端が削平され本来の地形は既に失われている。丘陵の尾根に多数の塚や壇がみられた。

2．発見された遺構

調査の結果，これらの塚や壇は，重層方壇，周溝と葺石をもつ塚，墳墓，周溝をもつが積土のない塚の4者から成る事がわかった。こうした塚は開田された地区にも散布していたらしい。

①重層方壇　南側約1/3が開田により削平されているが，現況から原形を復原すると，一辺約14㎜の方形を示し他の遺構と比べ著しく大きい。地山を削り残し更に積土した三段築成の規格的な方壇であり，東側中央部には昇降路と思われる張り出し部がある。方壇の中心部には長軸約3.5㎜，短軸3.2㎜，深さ約30㎝の方形土壙があり，その中央部は盗掘されていたが，盗掘をまぬがれた3隅からは北宋銭が3枚出土した。この方壇は中心軸がほぼ南北を指す。

②周溝と葺石をもつ塚　遺跡の北端にあり，外形はほぼ方形で，周溝をもつ。塚は積土によってつくられており，頂部に葺石がある。主体部が盗掘されているので塚の性格は不明である。

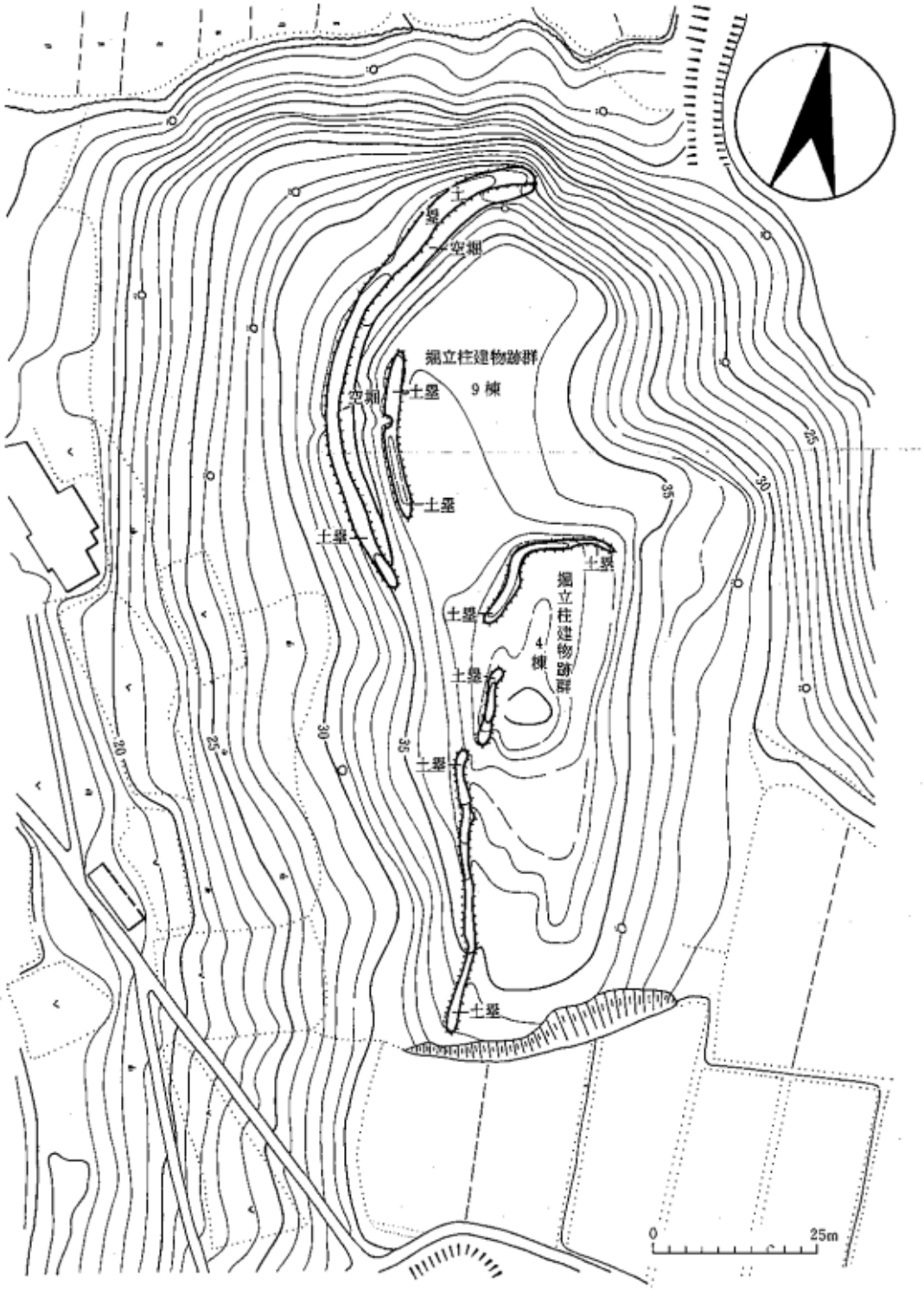
③墳墓　墳墓は径2㎜前後の方形ないし円形のマウンドをもつものが多く火葬墓と土葬墓の2種がある(中にはマウンドがみられないものもある)。火葬墓は6基発見された。地山を浅く掘りこんだ円形のピットから人骨，寛永通宝，キセル等が出土した。蔵骨器は発見されなかった。土葬墓は20基発見された。土壙には長方形のものと丸形のものとがみられる。前者は箱棺，後者は桶棺を埋設したものであろう。土壙中に人骨の一部が残っているものや六道銭(寛永通宝など)，陶磁器，鉄鍋，刀子等が副葬されていたものもある。これらの墳墓は寛永通宝の出土により，江戸時代に築造された事が明らかである。

④周溝をもつ積土のない塚　丘陵頂部に1基，東側斜面に7基発見された。マウンドはロームを削ってつくり出しており直径4㎜位で周溝をもつ。マウンドから鉄製品，周溝からは土師器，須恵器などが出土した。以上の4種の塚のほかに，馬を埋葬した墓も1基発見された。

3．各遺構の年代

①は北宋銭が土壙中から出土しているので中世以降に構築され，③の遺構と重要な関係があるものと考えられる。墳墓に伴う祭壇のようなものかも知れない。②は構築年代，遺構の性格は不明であるが，経塚等の可能性もある。③は江戸時代の土葬，火葬墓である。④の性格は不明であるが，周溝より出土した土師器，須恵器等から古墳時代末期～平安時代に築造されたものと考えられる。

（熊谷幹男）



第11図　八谷館跡遺構略図

(10) 八谷館跡 (第1次調査)

1. 遺跡の立地

大和町の北東部は丘陵地帯となっており，その南麓の蒜袋地区には，大小の谷や沢が複雑に入りこんだ小丘陵が発達している。この丘陵の尾根上に中世のころ築造，使用されたと考えられる八谷館と御所館(俗称石神館)の2つの館跡がある。いずれも丘陵の自然地形と，前面の平野部を流れる吉田川，善川を考慮に入れた要塞的な性格をもつ館である。この地域は仙台平野および松島・利府方面から大崎耕土に通じる交通上の重要な位置を占めており，周辺にはほかにも多数の館跡が分布している。八谷館は南北に細長い丘陵の地形を利用して造られた館跡で中央部は開田のため破壊されている。北接して，御所館跡があるが，その境は，大きな谷によって区切られる。この館跡については「仙台藩古城書上」(江戸初期)の蒜袋村の項に次のような記載が見られる。

八谷城　　東西18間　南北38間

　東西に18間南北に16間地形あり

右城主八谷冠者永禄年中迄居住と申傳候又説には八谷越前守と申者天正年中迄居住共申傳候

2. 調査の概要

自動車道は八谷館の北部，全体の$\frac{1}{3}$を通るためこの地域を調査対象とし，約3700㎡を発掘した。その結果下記の遺構および遺物を検出した。

掘立柱建物遺構　調査区域の北半にある平坦面で多数の柱穴が検出された。建物が数回，同じ場所に立てかえられたため，重複個所が多く，どの建物に付属するかわからない柱穴もある。現在までに13棟前後の建物跡を推定している。今後の検討によりさらに多くの建物跡の形態・性格が判明するものと考えられる。

門と通路　平坦面と斜面の境に通路および門と推定されるものが発見された。通路は斜面を凹形にほり下げ傾斜をゆるめている。この通路は埋めてあるので，この館が廃棄される段階では使用されていなかったものである。城の構造を知る重要な遺構である。

土塁・空堀　北側および西側の台地の周縁と斜面に空堀と土塁が断続的にめぐっている。空堀は浅いが，斜面を急峻にして要塞としての性格を強めている。土塁は高いもので1㎜と小規模である。

貯蔵穴，炭化米　直径1㎜，深さ60㎝の貯蔵穴(?)の中から炭化米が出土した。

3. 出土遺物

〈陶磁器〉　大甕の破片が出土した。越前焼と推定されるもの(鎌倉時代)と地元産と思われる

もの(室町時代中頃)とがあり，後者の多い。また，青磁・白磁の破片も数十片出土した。すべて中国から輸入されたものである。年代は中国元末～明の時代で，生産地は中国南部で徳化窯・龍泉窯のものもふくまれている。その他，火鉢と思われる破片がある。雷文がついており，15世紀頃のものと推定される。小さな灯明皿および土鈴も出土している。

〈古銭〉大定通宝・元豊通宝・咸平通宝・景徳元宝・その他文字の読めない破片もふくめ12枚出土している。初鋳は中国の元・宋の時代である。

〈鉄製品〉建物に使用されたと思われる鉄釘が20本以上出土している。長さ６～7㎝前後で，断面は四角のものが多い。鉄刀の破片が2点ある。その他用途不明のものが若干ある。

〈その他の出土品〉石臼・石硯・砥石などの破片および多量の炭化米がある。

附：古墳時代の遺構と遺物　丘陵の北端に近い所で，古墳の主体部が検出され，内部から直刀，鉄鏃，装身具(管玉，ガラス玉，コハク玉など約20点)が出土した。しかし，墳丘および周溝は確認できなかった。

4．まとめ

①　今回調査した個所は，はじめ御所館の一部としたが八谷館の方に属すると考えたほうがよいと思われる。

②　平坦面から多数の掘立柱の建物群，通路，門などが検出されたのは県内でははじめてである。今後の館調査の指標となろう。なお，東北地方北部や関東の館跡の比較資料として重要である。

③　出土品は陶磁器，古銭，鉄釘，鉄刀，石ウス，硯，炭化米など比較的多い。磁器は中国産であることも注目される。また大甕の多くは，地元産と推定されるので東北地方における窯跡調査が必要になってきた。これらの遺物は当時の商品流通の機構を調べる上で重要である。

④　年代は出土品からみると15世紀前後のものが多い。「古城書上」には永禄または天正年中(16世紀)まで居館していたとある。遺構についても重複および改築がみられるので，長期の存続が考えられる。大ざっぱにいって，室町時代後半といってよいであろ。

⑤　古墳の主体部と副葬品の検出により古墳時代にこの地区に築造されていた古墳が館の建設時に破壊されたことがわかった。

〈付記〉

掘立柱の建物跡については，多賀城跡調査研究所長岡田茂弘氏のご教示を得た。陶磁器については東北大学芹沢長介教授を通じて三上次男，長谷部楽爾，楢崎彰一の三氏に鑑定していただいた。

（藤沼邦彦）

図　　版

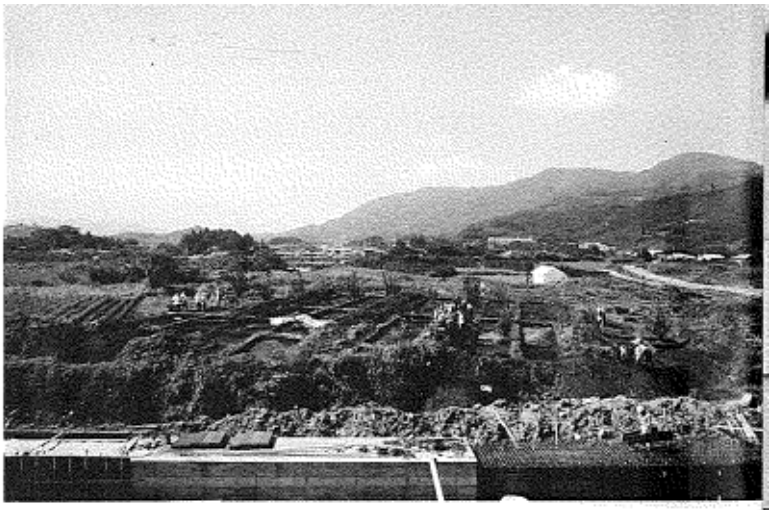


写真１　菅生田遺跡
北から遺跡を望む

写真２　菅生田遺跡
第13号住居炉跡

写真３　菅生田遺跡
第15号住居炉跡

写真 4　権現山遺跡
遺跡の遠景

写真 5　権現山遺跡
発掘前の塚の状況

写真 6　権現山遺跡
塚積上の状況

写真 7　佐保山東遺跡
遺跡の状況

写真 8　権現森遺跡
北から望んだ遠景

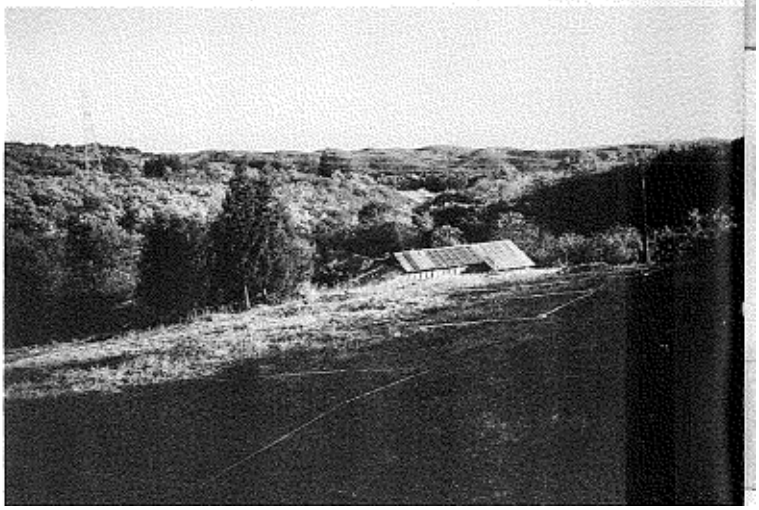


写真 9　権現森遺跡
発掘地点の状況

写真10　宮下遺跡
住居跡

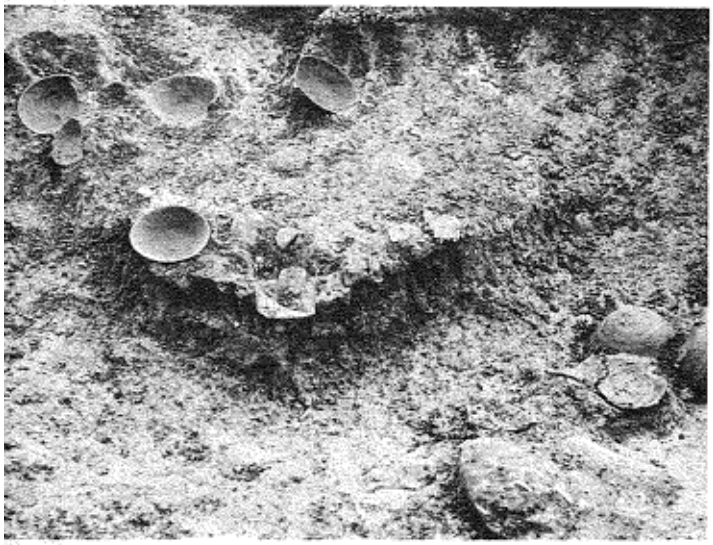


写真11　宮下遺跡
ピット内からの土器の
出土状況

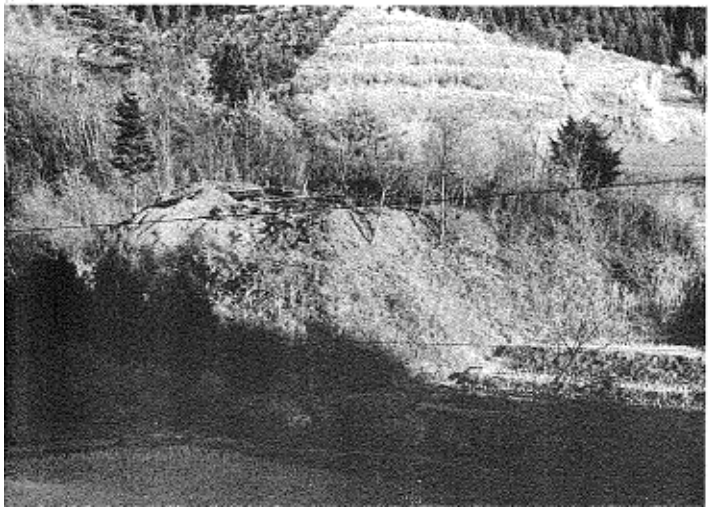


写真12　菅ノ沢遺跡
遺跡を西から望む

写真13　原前南遺跡
東から遺跡を望む

写真14　原前南遺跡
第1号住居跡

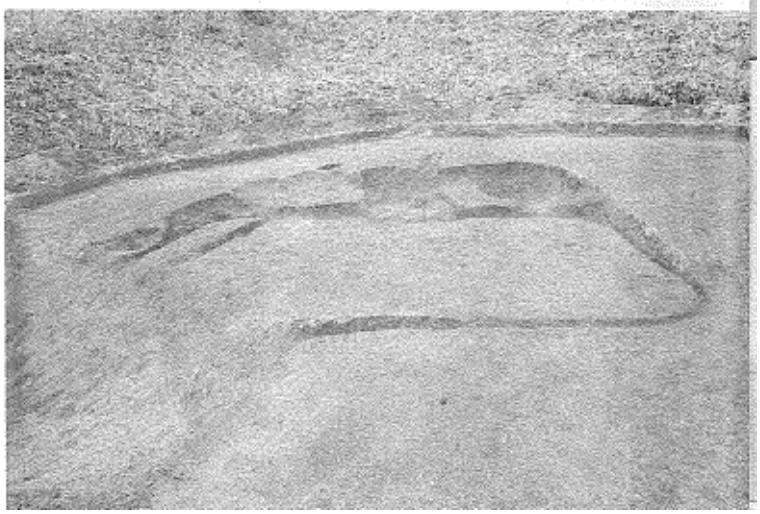


写真15　原前南遺跡
第2号・第3号住居跡

写真16　勝負沢遺跡
遺跡を北から望む

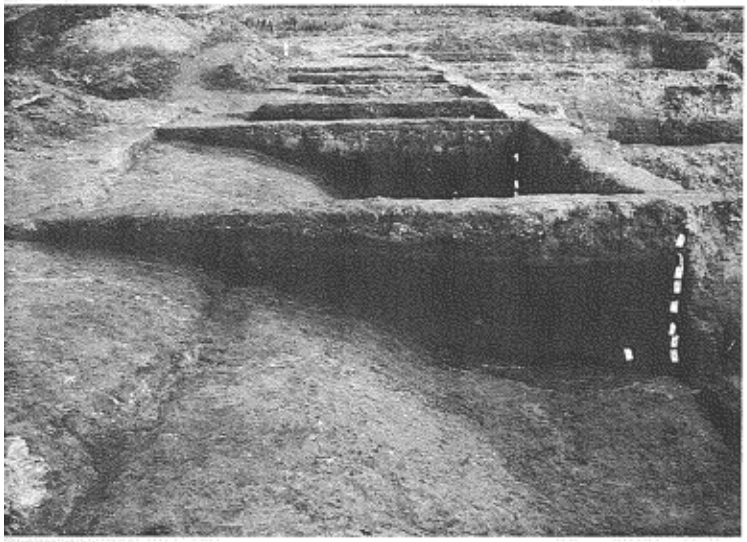


写真17　勝負沢遺跡
遺物包含層の堆積状況

写真18　勝負沢遺跡
遺物の出土状況

写真19　日光山遺跡
重層方墳発掘前の状況

写真20　日光山遺跡
土葬墓・火葬墓の状況

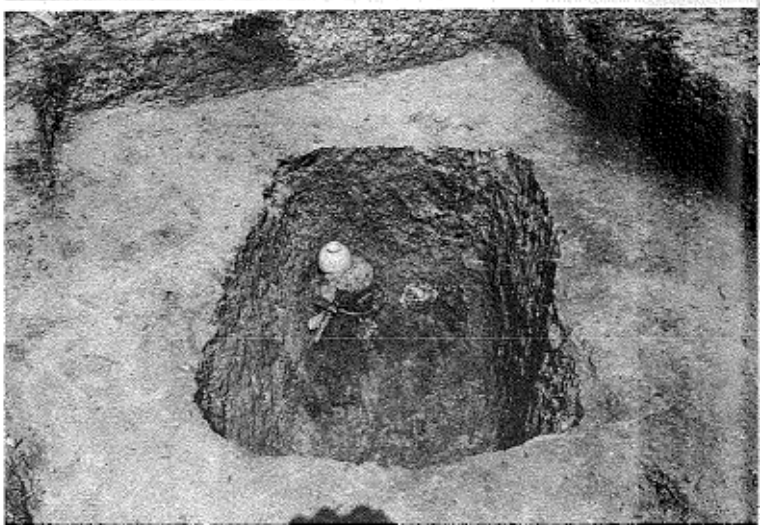


写真21　日光山遺跡
第12号土葬墓の発掘状況

写真23　八谷館跡
発掘風景

写真24　八谷館跡
北側平坦面より上段平坦面を望む

写真25　八谷館跡
上段平坦面より見た北側平坦面
－掘立柱建物跡－

写真26　八谷館跡
北側平坦面より見た
上段平坦面
－掘立柱建物群－

写真27　八谷館跡
北側平坦面
－掘立柱建物群－

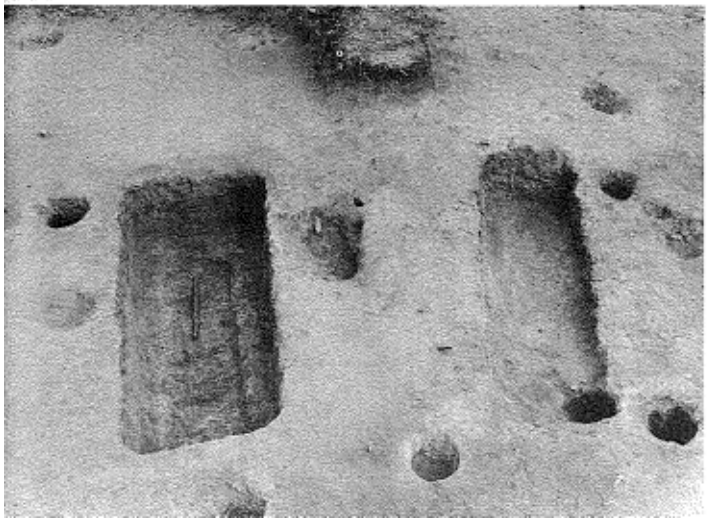


写真28　八谷館跡
古墳主体部
－１号・２号－